

■ 書評 ■

『セックス・アンド・デス—生物学の哲学への招待』

キム・ステレルニーとポール・E・グリフィス著，春秋社，2009年7月，本体価格4700円

まず，率直に言わせて頂くならば，もし，副題にある生物科学における哲学の歴史や現状の把握を手軽に行いたいと思ひ，本書を読み解こうとお考えであつたら，少々期待はずれとなるかも知れない。次いで，本書題名の「性と死」についても，生物哲学を俯瞰する書のタイトルに果たして相応しいのかも検討する必要があるろう。少なくとも，実際の内容を正しく反映しているようには思われなひ。しかし，印象的である。そのため，約400頁（附録含む）の分厚い本にも関わらず，生物哲学などとは無関係で，やや思慮に欠く門外漢（すなわち，評者）ですら思わず手を伸ばしてしまつた。仮に，もし，そのような人間の行動にまで目配せしての題名選択であるのなら，（ヒトの行動進化についても専門とする）著者らは木訥なオージーと見せかけ，実はとても狡猾だつたことが推し量られよう。さらに，彼らにとっての身近な（対局半球に住まう者のスズメ・カラス程度の）動物が，オーストラロレーシア産の種（実際に本書に登場した種としてクロセイタカシギ，カカポ，オーストラリアカササギ，タスマニアン・デビル，ウォンバットあるいは現地ではびこる外来種（アカギツネ，アナウサギなど）など），であり，その地で探鳥やトレッキングした者，あるいはこれからする者を十分に楽しませてくれるだろう。評者は，ここ数年，夏鳥の感染症疫学を扱う事情で，毎年，オーストラロレーシアに相当苦勞をして訪れ，そのたびに，もう，来年はないと思つていた。しかし，本書読了直後，次の渡航を待ち遠

しい気持ちにさせたほどだつた。さらに，ユニークな生活環や延長された表現型などの事例では槍形吸虫，ノミ，フクロムシなどの記述も臨場感があり，野生動物の寄生虫症を専門とする評者を熱くさせた。生物哲学は，評者にとって天敵，少なくとも，大学での授業で引用するため我慢して読んだ本が多いが，今回，本書を挫折しないで読み通すことができたのは，題名含め，こういった細々した仕掛けがあつたからかも知れない。繰り返すが，この著者らがここまで計算していたとすれば，きっと人間の行動・心理にも卓越した観察眼をお持ちなのであろう。本書は1. 緒言，2. 遺伝子・分子・生物体，3. 生物体・集団・種，4. 進化の説明，5. 進化と人間本性，6. 結語の各部（パート）に分かれ，さらに第1部は生物哲学と社会問題（道徳性，利他的行動など）との関連性，進化の定説（おもにドーキンス）についての概説と環境保全により容認された価値としてのエコロジー，第2部ではグールド，メンデル，ソーバーなどの学説（遺伝子淘汰，分子遺伝学など），第3部では利他行動，集団選択，種淘汰，適応など，第4部では適応，生態学，ニッチ，第5部では社会生物学，進化心理学，ミーム，第6部では生命の定義と普遍生物学，創発現象，ガイア仮説など，それぞれ幾つかの章に細分されて詳述されたが，要するに著者らの優れた人間社会（科学）の洞察を膠にして，専門である生物科学の哲学を見事に関連付けた点で独特の位置を築いた書であらう。

（浅川満彦／酪農学園大学）